

農民二千三百人を動員した 三里松原の松植え立て

岡垣歴史文化研究会 石井 邦一



▲成田山不動寺から見渡す三里松原

成田山不動寺まで登って、その境内から眺める響灘の海と三里松原を俯瞰する景観は、まさに天下一品である。弓なりに大きく曲がった海岸線の内懐に、青々とした松林が続く様は、まさに一幅の絵を眺めるような画趣がある。

この松原は、以前はわずかな雑木しかない砂山だったので、暴風雨が荒れると、海からの潮風が内陸部に吹き込み、田圃や畑の作物

を痛め、その損耗に人びとはいつも泣かされてきた。

慶長5(1600)年9月の関ヶ原合戦のあと、それまで筑前領主だった小早川秀秋に代わって黒田長政が豊前から転封し、12月に筑前名島城に入った。この後、長政は警固村福岡に築城し、この地を自分の出身地である備前国邑久郡福岡に因んで、福岡と改めた。

さらに、藩政を確立する最初の課題の一つが潮害対策だった。

慶長15(1610)年に生松原の松植え立てを手始めに、明暦から寛文・延宝(1655～1681年)にかけて、遠賀郡域の浜山に松植え立てをすすめ、享保4(1719)年には30万4千580坪の範囲に及んだ。しかし植え終わった松も、手入れが不十分で松が枯れたり、盗伐されて薪にされるなどで荒廃した。そのため奉行所は、松を「伐荒候者可為重科事」と触れを出し、その処罰は「枝一本指一本、木一本腕一本」と言われた。

本格的な松植え立て事業は、濱山植立奉行を任命して宝暦2(1752)年から同8年まで7年間をかけ着手された。このときの植え立て範囲は、以前に植えた松が枯渴した場所の再植え立てを含め、芦屋・黒山・糠塚・松原の4ヶ村の村域1万757坪に及んだ。

植立仕法は、一坪に2尺(約60センチメートル)以上の松苗を一本植えて、苗木の2尺四方に根芝を打つものであった。宝暦10(1760)年には、さらに植え立てが追加され、遠賀郡中から2千300人の農民が動員された。現在見られる三里松原が仕上がったのは、この作業によってである。

松苗の植え立て事業が終わったとき、福岡藩は植林した松の管理を委ねるため、浜山才判請持の役職を設けた。これに岡垣の村庄屋の中から糠塚村庄屋の正作が選任された。その子の市郎の代まで、村庄屋を兼ねて松原の管理・監督に当たったと伝えられている。

現在の三里松原が仕上がったのはこのときであるが、当時は「岡ノ松原」と呼称されていた。

松苗を植え立てた浜山は、所属する村ごとに羊齒垣仕調(シダで垣根を設け苗を保護する)が行われ、松苗が枯れたり未熟な場合は、受け持ちになった村が責任をもって手入れした。

当時、こうした地方普請(土木工事)は農閑期に農閑夫役(農閑期に課せられる公共の仕事の労役)であるが、この松植え立てと管理は農繁期と農閑期を問わず要請されるので、これを担当する農民の苦勞は並大抵ではなかった。

伊藤常足が編纂した「太宰管内志」には、「葦屋ノ浦より西ノ内浦まで三里の間海浜に松原打続きてめづらしき処なり。此松原を岡ノ松原と云」と書かれている。

この松原の名称の点では、神功皇后伝承では「垣崎松原」、近世には「岡松原」と云い、現在では「三里松原」と変化している。